

## 2019年コンペティションI 総評

208組と応募多数だった今年のコンペティションIは、成熟した思考と実験精神のバランスが巧みな作品が複数登場した。なかでも下村唯（審査員賞、ポロサス寄付基金 Camping2019 賞）は、「日本の」「コンテンポラリーダンス」をこれまでにない批評的視座から問い直す、ユーモアも忘れない。岡本優（若手振付家のための在日フランス大使館賞・シビウ国際演劇祭賞）は、高い技術を主題の表現に奉仕させ、衣装、メイク、美術と一体となって近未来の身体像を提示した。奨励賞の2組、乗松薫/鉄田えみ/チェ・ミョンヒョンは、丁寧なプロセスを踏んで、一般的規範から逸脱したダンサーの身体が秘める、崇高さすら漂う美しさを抽出。チェン・イーエンも、個性的な身体言語で、自我の切実なドラマを静かに描き出した。どれも観る者に訴えかける明白さ、強さがあり、個人的にも記憶に残る作品だった。

ダンスは、私的な感情の吐露にとどまらず、概念化を経て、自分の気づきを普遍的な個人と社会の関係の次元へと導くことができるアートだ。一瞬で消費される「うまいダンス」より、あらゆる方法で常識を揺さぶり、観客にいま・ここに共に生きていることの意味を問う振付作品をこれからも期待している。

岡見さえ

今回は、ビデオ審査の時点で、各国から様々な年齢の国際色豊かな作品がならびとても興味深く審査ができました。作品から全体の「風」のようなものを感じたかったけれど、その意味の現在の傾向は感じられなかった。作品を創るというワクワク感のようなものが全般的に少し足りないかな。今回の本選での見え方は、作品性やコンセプトを表側にするタイプと裏側に持っていくタイプの違いを感じました。どちらがよいという訳でないが、からだそのものの使い方（ダンス的訓練をするのか、しないのか）随分と幅があるなど。

香港やラトビアから参加した作品の身体性の高さ、訓練の高さは、ダンサーたちにとっては非常に刺激的なアプローチだったと思います。一方、少し太めの身体や日常的なからだのみでのアプローチはホッとする反面、物足りなさも感じます。発表後の総評でも少し述べたが、ビデオの審査の時点で、何分間の作品（20分間の必要はない）で、なにを伝える、届けたいのか、もっと熟考してほしいと感じました。さらには、作品を通して「届ける力」を持続してほしいと強く感じました。

フェスティバル後にも続くダンスの道、可能性を探り、具体的には、どうやったらお客様が集まってくるかまで責任を感じるような作品づくりをしてほしいなあと思いました。このダンスの世界は朽ちることないと思いますが、離れずにワクワクし続けられればと思います。

近藤良平

現代サーカスを取り入れたラトビアのヤナ・ナツカから自閉症の身体を取り上げたフィリピンのジャフィット・マリ・カブリンまで、国籍も技法も主題もこれまで以上に多様な広がりが見られた。

圧巻だったのは下村唯『亡命入門：夢ノ国』。関東圏で彼の作品が披露されたのはこれが初めてだが、いわゆる「コンテンポラリーダンス」への批評的距離とズラシといい、あざといまでの巧みな構成といい、今回もとても完成度が高かった。ほかの作品も見てみたいと強く思わせる。自身が優れたダンサーであり、今回も激しいパフォーマンスを見せた岡本優が若手振付家のための在日フランス大使館賞に選ばれたのは喜ばしい。彼女がこれからフランスで何を吸収し帰国後に何を見せてくれるか楽しみ。乗松薫／鉄田えみ／チェ・ミョンヒョン『The Ignited Body』は、薄明に浮かぶストップモーションの身体の美しさ。チェン・イーエン『Self-hate』のデュエットも心に染み入るものがあった。そのほかの出場作もそれぞれに魅力的だった。ただ、昨年が続いて、今回もダンサーの身体そのものが舞台に屹立するような作品が見られなかったのは残念。

浜野文雄

今年も、横浜ダンスコレクションコンペティションIの、審査員を務める栄誉をいただきました。

今年のコンペティションは、日本、ひいてはアジアやヨーロッパのアーティストたちにとって、おそらく例年にも増して貴重な機会であったに違いありません。

本コンペティションが、才能のあるアーティストたちにとって重要であることはもちろんのこと、多数の国からこれほどたくさんのアーティストたちが集まるということが、いかに重要でかけがえのないものであるかということを忘れてはなりません。

それぞれの作品について私が感じた全般の印象は、高度な技術、創造性、オリジナリティに溢れ、詩的で、意欲的な、あるいは時に、音楽の選択の弱さ、紋切り型、なぜダンスをしているのかを理解していないこと…しかし、それもまたコンペティションというものであることは確かです。

最後になりますが、アーティストたちが、ダンスに取り組み、私たちの差異や多様性について、より深く問う姿を見ることができて非常に嬉しく思います。そして、来年の横浜ダンスコレクションでは私たちをさらに驚かせて欲しいと願っております。彼らが予想されていることではないものをみせてくれることを…。

横浜ダンスコレクションのチームの皆様と、在日フランス大使館の協力者の方々に深くお礼申し上げます。

エマール・クロニエ